

氏 名	日 野 康一郎		
学位(専攻分野)	博士 (歴史学)		
学 位 記 番 号	博史乙 第 18 号		
学位授与の日付	2015 年 3 月 7 日		
学位授与の要件	学位規則 (昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 2 項該当		
学 位 論 文 題 目	経済 地域 明末の経済発展と 経済 秩序の問題 ―江西省東北地域を中心に―		
論文審査委員	主 査 教 授	飯 島	渉
	副 査 教 授	青 木	敦
	副 査 准教授	二 宮	文 子
	副 査 立教大学教授		
		上 田	信

論文内容の要旨

日 野 康一郎

明末清初期は、中国史における大きな転換期の一つとされる時代である。商工業の発展と海外貿易の拡大は都市の興隆を促し、大地主や大商人がその繁栄を謳歌した。貨幣経済は農村へも浸透して家内工業が発達する一方、多くの人々が農村を離れて都市で手工業労働やサービス業に従事した。都市部では、華やかな庶民文化が花開き、街は殷賑を極めた。しかし、その繁栄の裏で都市と農村の格差、貧富の格差が広がり、経済的繁栄に与れない人々の不満も高まっていた。都市や農村では、暴動や、小作料の不払い運動が広がり、地域秩序の動揺が始まる。やがて、小規模の反乱が頻発しはじめ、これがやがて地域を越えた大反乱へと発展して明朝は滅亡し、清朝の時代が始まるのである。これまで、この激動の明末清初期について、資本主義萌芽論や、郷紳論、さらに地域社会論や、グローバルヒストリーから見た考察論など、様々な視点からこの時代の持つ特質が研究されてきた。しかし、そのいずれも指摘するのが、明末における経済発展と、それを背景にした「地方の台頭」

である。

そこで、本稿では、主に明末清初期に起きた暴動・反乱を題材に、この時代の経済発展と、それが地域社会に及ぼした影響を考察した。具体的には、江西省を舞台に起きた明末の反宦官民変と、清初の反乱を主に取り上げた。江西省を考察対象にしたのは、この地域が、中国華中地方において、政治・経済上、特色ある地域の一つであるからであり、そのなかで東北地域を選んだのは、この地区が山地開発や都市開発の進む経済の発達した地域であったからである。その考察については、以下の構成で進めた。

まず、第一章から四章まで、明の万暦年間、江西省上饒県で起きた民変について考察した。この暴動は、中央より派遣された宦官潘相が、上饒県にある禁山区、銅塘山で、樹木の伐採や鉱山開発を実施したことから起きた暴動である。まず、第一章では、銅塘山が、人々の立ち入りを禁止した禁山区に指定された歴史を考察し、漢族の南方進出以来、平野部から山地へ開発を進める移住者と、これを管理したい王朝の確執の歴史を明らかにした。そのうえで、第二章では、銅塘山の開発の背景にある山区経済の発展と、それが地域にもたらした治安悪化や環境破壊の問題、地域に既得権益を持つ地元出身官僚の活動と地方官僚の対応を考察した。そして、第三章では、上饒県民変の結果が清代の山地政策に与えた影響について調べ、第四章では、官僚による山地開発論を取り上げた。この第三章・四章での考察を通じて、上饒県民変における山地開発の問題は、明代だけの問題ではなく、清代、そして現代中国の経済・人口・環境問題にもつながることを明らかにした。

第五章と第六章では、江西省浮梁県景德鎮で起きた民変について考察した。この民変も宦官潘相が引き起こしたものである。この暴動の考察にあたり、まず、第五章では、陶磁器の名産地として国内だけでなく海外市場にまで販路を広げ、発展を続ける景德鎮の抱えた負の側面を明らかにした。産業都市として拡大を続ける景德鎮には多くの人々が仕事を求めて集まって、やがて治安の悪化をもたらした。地域対立による暴動を引き起こした。また、窯場の建設が環境破壊をもたらすなど、地域社会に動揺をもたらしたのである。地方官は、急速に進む経済発展を抑えるのに苦慮した。そして、第六章では、反宦官民変である景德鎮民変を考察した。この暴動は、景德鎮の監督官となった宦官潘相の経営方針に、陶工たちが反発して起こした暴動である。筆者は、この暴動をあらためて考察し、宦官が景德鎮を監督した目的や、潘相の下で利益を得た商人や開発業者がいたことや、この暴動の背景にも地元官僚

の既得権益がからんでいたことを明らかにした。

第七章では、これら上饒県銅塘山と浮梁県景德鎮を舞台に、清代康熙年間に起きた、柯昇と程鳳の叛乱を考察した。柯昇は広信府副将、程鳳は饒州府参将という地位にいた武官であった。しかし、もと明の將軍、呉三桂・耿精忠・尚之信の三人が三藩の乱を起こすと、三藩側に寝返ってともに反乱を起こした人物である。本章では、この反乱に対する考察を通じて、江西・福建・浙江三省をつなぐ交通の要衝としての銅塘山と、江西省と安徽省をつなぐ交通の要衝にある景德鎮の地理的特質を明らかにするとともに、華北に拠点を置く王朝の江南支配における、江西省の地理的重要性をも明らかにした。また、反乱を支えた山寇の活動にも注目した。

最後に第八章では、考察の舞台を江西省から、明清の首都北京へと移した。本章では、明末北京における流入民の問題と、それが明末の政局に与えた影響について考察した。明の首都として、早くから様々な人々が集まっていた北京には、農村や軍から逃亡した人々、盗賊、無頼の徒、邪教徒、蒙古族や満州族のスパイなどが城内に潜伏し、北京社会に溶け込んで暮らしていた。本章では彼らの活動が、やがて門番である宦官や武官と結託して、皇城内にまで潜入し、明の政局にまで影響を与えた様相を明らかにした。明末の銅塘山や景德鎮の経済発展を支え、暴動の主力となったのは、農村を離れた流入民たちであったが、彼らは中央政局にまで入り込むようになっていたのである。

以上の考察を通じて、結論では、発展する経済と、その利益をめぐる官僚・宦官の権益争い、人口流動と治安の悪化・環境破壊の問題、資源の有効利用と平等な分配の問題など、現代中国の問題にもつながる激動の明末清初期の様相を明らかにした。

審査の結果の要旨

本論文は、明末清初に起きた暴動や反乱をとりあげ、経済発展とそれが地域社会に及ぼした影響を考察したものである。分析対象は、揚子江下流域の江西省を中心としている。それは、景德鎮を擁するこの地域が山地開発などによって経済発展が顕著であったこと、それを背景として、暴動や反乱（以下、「民変」と呼ぶ）が頻発した地域であったからである。中国社会が急速な経済発展を経験するなかで、内外の研究の関心は、しだいに民変から遠ざかっていった。本論文は、こうした研究動

向への批判でもあり、民変に再度光をあてたものである。

「はじめに」において、日本や中国を中心とする諸外国の先行研究を整理し、課題を明示し、次に、第一章から第四章において、明の万暦年間に江西省上饒県で起きた民変について詳しく考察した。この暴動は、中央から派遣された宦官の潘相が、上饒県にあった禁山区の銅塘山で樹木の伐採や鉞山開発を進めたことをきっかけとして起きた。第一章で、銅塘山が人々の立ち入りを禁止された禁山区に指定された経緯を考察し、漢族の南方進出のなかで、平野部から山地へと開発を進める移住者と、これを管理しようとする政権の確執を明らかにした。第二章では、銅塘山の開発の背景にあった山区経済の発展と、それが地域にもたらした影響を、治安の悪化や環境破壊、既得権益を持つ地元出身の官僚の活動や地方官の対応を中心に考察した。第三章では、上饒県民変が、政権側の山地政策に与えた影響を論じ、第四章では、官僚の山地開発論を検討した。以上の考察を通じて、上饒県民変の背景となった山地開発をめぐる構造は、明代固有の問題ではなく、その後の清代、あるいは現代中国の経済・社会や環境問題にもつながるものであることを指摘した。

次に、第五章と第六章で、江西省浮梁県景德鎮で起きた民変について考察した。第五章で、陶磁器の生産地として国内だけではなく海外市場にまで販路を広げ、発展を続けていた景德鎮の抱える社会問題を明らかにした。景德鎮が産業都市として発展を続けるためには多くの人々を労働者として確保することが必要であり、社会の流動性は、治安の悪化をもたらし、暴動の背景となった。また、窯場の建設が環境を破壊するものであったことも地域社会の秩序をゆるがすものであった。第六章では、景德鎮の監督官となった宦官潘相の経営方針に、陶磁器の生産のために働く陶工たちが反発して起こした暴動の経過を詳細に考察し、宦官による景德鎮の監督の目的や具体的なあり方を論じ、他方、潘相の下で利益を得ていた商人や開発業者もいたことを指摘した。

第七章では、上饒県銅塘山と浮梁県景德鎮を舞台に、清代康熙年間に起きた、柯昇と程鳳の叛乱を考察した。柯昇は広信府副将、程鳳は饒州府参将という地位の武官であり、もともと明の將軍であった呉三桂などが三藩の乱を起こすと、三藩側に寝返ってともに反乱を起こした。この反乱の推移を考察し、江西・福建・浙江三省をつなぐ交通の要衝であった銅塘山と、江西省と安徽省をつなぐ交通の要衝にあった景德鎮の特質に注目し、華北に拠点を置く王朝の江南支配における重要性を論じた。

第八章では、考察の舞台を首都北京へと移し、明末の北京における流入民の引き起こしたさまざまな問題と、それが明末の中央政局に与えた影響について考察した。

以上の考察を通じて、結論では、発展する経済と、その利益をめぐる官僚・宦官の権益争い、人口の流動化と治安の悪化、環境破壊、資源の有効利用と平等な分配の問題などの重要性を指摘し、現代中国の社会問題にもつながる様相を明らかにした。

本論文が利用した資料は公刊されたものが中心だが、筆者が留学などの機会を利用して中国の公文書館などにおいて閲覧した未公刊資料も利用されている。また、本論文のいくつかの章は、学界を代表する学術雑誌である『東洋学報』に掲載された論文や中国で開催された国際学会での発表論文を基礎とした中国語論文を土台にしており、筆者はこれらをもとに、問題の設定、八章からなる本論と結論に再編して、本論文を執筆した。

審査委員会では、本論文が時間をかけて収集整理した豊富な資料を丁寧に分析し、江西省を中心に、民変の具体像を的確に明らかにしていることを高く評価する意見が出された。また、本論文が指摘している現代中国との共通性、すなわち経済開発をめぐる地域秩序の動揺、開発の際の環境への負荷、鉱山開発や山地開発を支えた労働者がさまざまな地域からリクルートされることを背景とした社会の流動性などの指摘も妥当なものであると評価された。

他方、民変をめぐる構造をより深く掘り下げ、日本や諸外国の社会とも比較しながら、現代社会との連続と断絶を論じるなどのより抽象度の高い議論が今後の課題であることも指摘された。

しかし、近年の内外の学界、ことに日本の学界では、社会変動の重要な要因である民変を本格的にとりあげた研究はほとんどなく、本論文が明らかにした歴史的事実とその解釈は学界への重要な貢献であることは明らかである。

以上の所見を総合的に判断した結果、本審査委員会は、本論文は博士学位論文として十分な水準に達していると判断する。